

白い結婚のはずが、眠っている間に
腹黒ヤンデレ王太子に孕まされました

目次

白い結婚のほすが、眠っている間に
腹黒ヤンデレ王太子に孕まされました

5

番外編 その後の夫婦の夜

235

番外編 王太子一家の休日

259

番外編 リアナから見た兄夫婦

281

白い結婚のはずが、眠っている間に
腹黒ヤンデレ王子に孕まされました

プロローグ

「おめでどうぞございます。やはりご懐妊されていますね」

エステファニアを診察した宮廷医が言った。

上品で落ち着きのある家具と装飾品で統一された王太子妃の私室は、人払いをしてあるため部屋の主であるエステファニアに、侍女と宮廷医しかいない。

「……は？」

エステファニアは青白い顔でベッドに座ったまま、目を見開いた。信じられない言葉に、冷や汗がこめかみをつたう。

数日前から、エステファニアは体調が悪かった。

初めはお腹がもやもやして脂が乗った肉や魚を食べられない程度だったのだが、次第に症状が重くなっていき、食べられるものが減っていった。

そこからさらに症状は重くなり、一日に何度も吐き気に襲われて、日常生活に支障をきたすほどになっていた。

そして今朝になると、あまりの気持ち悪さにドレスを着ることすら辛くなってしまったのだ。何か重い病気になってしまったのか、食あたりでもしたのか。そう疑って、宮廷医を呼んだのだが。

「現在の症状は、悪阻つづによるものでしょう。残念ながら、これを軽くする方法はなく……。落ち着くのを待つしかありません。ゆっくりと身体を休めていただいて、飲めそうだったら、水分だけでもとってください。陛下に王太子妃殿下の公務を免除していただけるよう、診断書を書いておきます」

「おめでどうぞございます、エステファニア様。シモン様のご帰還が待ち遠しいですね」

弾んだ声を上げる侍女に、エステファニアは荒い息を吐きながら何度も首を横に振った。侍女の言葉もそうだが、何よりも、目の前の現実を否定したかった。

妊娠したなんて、そんなことはありえない。

エステファニアはこの国、ロブレ王国の王太子妃だが、夫であるシモンとの間に身体の交わりはなかった。白い結婚であることが、皇女であるエステファニアが出したこの縁談の条件だったからだ。

もちろん、他の男性と交わったこともない。エステファニアの身は純潔だ。妊娠する可能性など、一切ないはずなのに。一体、何がどうなっているのだろう。

突然、視界が暗くなる。

宮廷医と侍女が慌てて手を伸ばすが、間に合わなかった。力の抜けた身体がベッドに倒れる。

「殿下！」

「エステファニア様！」

瞼の裏は真っ黒で何も見えないのに、ぐるぐると世界が回っているような感覚がした。慌てた宮廷医と侍女の声が聞こえてくるが、膜の外から語りかけられているような、遠くのものに感じる。

シモンが戦争から戻ってきたら、どう伝えればいいのだろう。エステファニアを慕い、献身的に尽くしていた彼は、どのような反応をするのだろうか。

『エステファニア様……』

意識を失いつつあるエステファニアの頭の中に、穏やかな夫の声が響き——これまでのことが、走馬灯のように駆け巡った。

第一章 皇女エステファニアの神託

「ロブレの王太子に嫁げ、ですって!？」

皇帝の執務室に、女性の叫び声が響いた。

ヒラソル帝国唯一の皇女である、エステファニアだ。

鮮やかな長い赤髪と、日に焼けていない白い肌のコントラストが眩しい。金糸で煌びやかな刺繍が施された深緑色のドレスに包まれた身体は華奢で、一見すると儂そうな雰囲気だった。

しかし、目尻が少し上がった猫のような目と意志の強そうな緑色の瞳が、彼女の見た目に反した性格を表している。

「静かにしろ。外に聞こえる」

部屋には、父と娘しかいなかった。普段なら侍従や護衛がいるが、彼らすら廊下に追い出されている。だから重要な話だろうとは思っていたが、まさか、こんな縁談だったとは。

エステファニアはわなわなと震えながら父親のそばに駆け寄り、声を潜めながらも強い口調で言った。

「あんなところに嫁いだところで、何になるといいます!？」

ロブレ王国はヒラソル帝国から一つ他の国を挟んで南に位置しており、百数十年前に建国されたまだ歴史の浅い国である。過去存在していた大国が分裂してできた国の一つであり、軍勢力と一部の土地の豊かさからそれなりの国力はあった。

しかし最古の歴史と最大の国土、飛びぬけた軍勢力をもって世界で唯一帝国の名を冠し、さらに神の加護を受けたヒラソルからすれば、格下も格下である。

エステファニアは産まれた時から、帝国の発展に繋がる婚姻を結ぶために生きてきた。それが皇女である自分の使命だと自負していた。

帝国貴族はもちろん、他国の王族や貴族に嫁ぐことになっても良いように、教養を深める努力を惜しまなかった。

だが特別秀でたところのない新興国であるロブレに嫁いだところで、それが帝国の利になるとは思えない。今までの努力が水の泡になるようなものだ。

さらに異を唱えようとしたが、すぐに口を嚙む。皇女である自分が結婚の話をされる意味を、思いついたのだ。

父である皇帝は、深いため息をつく。

「だがな、そう神託が下ったのだ」

エステファニアは歯を食い縛った。そう言われてしまうと、何も言えない。

神託は、ヒラソル帝国では絶対だった。神託のおかげで世界一の大国になり、それを永く維持し続け、神に愛された国と言われている。神託を信じてきたからこそ、今の帝国があるのだ。

だからヒラソル人は皇族も含めて、神託には絶対に逆らわない。むしろ、皇族だからこそ逆らえない。力のある者の行動は、国を大きく動かすからだ。皇族や貴族の結婚も、全て神託によって決められている。

それが当然のはずだったのに、ロブレ王国という嫁ぎ先が衝撃的すぎて頭から抜けてしまった。

「そんな……ロブレ、なんて……」

一瞬くらりときたが、なんとか踏ん張った。

神託で言われてしまえば、従うしかない。だが、納得はできなかった。

エステファニアは、神に愛されたヒラソル帝国唯一の皇女だ。神の御心に従うよう言われてきたし、そうして生きてきた。

そんな高貴な自分が、つい百数十年前に王族を名乗り始めたロブレ王家に嫁いで、この身を穢されることになるなんて。

他国に嫁ぐことになるという覚悟はしていたが、まさかあのような国だとは思もしなかった。

——神は、どうしてわたくしをこんな目に。

嘆きを呑み込んだが、瞳には涙が滲んだ。神託に背くような態度をとることも許されないのだ。

そんな娘を、皇帝も痛ましそうに見つめる。

「エステファニア……これは、おまえへの神託なのだ。きつとおまえにとつても、良い結果になる」

首を横に振りそうになり、慌てて俯く。

「何か……そうだな。おまえに望むことがあるなら、できるだけ叶えよう。何を持っていきたい？ 向こうも、帝国と繋がりができるのだ。こちらから持ちかけることとはいえ、頼みを無下にはできない」

「わ、わたくし……」

エステファニアは迷った。これから自分が言おうとしていることは神託に背くのかどうか、判断が難しかったのだ。

けれど……そうだ、神託の詳しい内容の確認という体にすれば良い。

「わ、わたくしは……子を、成さないといけないのでしょうか？」

「む？」

「神託は、どのような内容だったのでしょうか。神がわたくしにロブレの王太子と結ばれるようおっしゃられているのですから、喜んで嫁ぎます」

心にもない言葉を無理矢理絞り出しているからか、みっともないほどに声が震えていた。

「ですが……わ、わたくしは、できれば……ロブレの王子などとは、交わりたくないのです！」

身分ある者の婚姻なのだから、普通は子どもをつくることが前提になるだろう。

だが神託に従うという観点では、そうとも限らない。神託は「もしなければいけないこと」を教えてくれるだけであり、逆に神託にない部分はどうしても良いのだ。

つまり、神託で「ロブレに嫁いで子どもを成せ」まで言われていれば、絶対にそうしなければならぬ。だが「ロブレに嫁げ」だけであれば、普通は子どもを成すことを含むと解釈するのだろう

が、厳密にはそこまでしなくても良いことになる。

神託に従い大切にしてきたこの身を、名ばかりの王族であるロブレの男なんかに穢されるなど、エステファニアには到底耐えられることではなかった。

「そうか。確かに、子を成すことは言われていなかったな……。よし。おまえの身を穢すことのないよう、条件をつけておこう。我々と姻戚になれるだけでも、向こうにとっては僥倖だろう」

「お父様……！」

エステファニアは表情を輝かせ、細い指先で涙を拭った。

名ばかりの妻ならば、まだ耐えられる。子どもは適当な側室にでもつくってもらえば良い。

こうして、ヒラソル帝国からロブレ王国へと縁談を申し込むことになった。

これには帝国内の人々も、ロブレ王国も、他の国々も驚いた。

ロブレはこの機を逃すわけにはいかないと条件を呑み、すぐにエステファニアとロブレ王太子の結婚が決まった。

帝国とロブレが繋がれば、世界のパワーバランスが変化する。特に、ロブレ周辺の国々からしたら堪ったものではない。

彼らが奔走している間に、二人の結婚の準備は着々と進んでいった。

エステファニアとロブレ王太子の結婚が決まってから、数か月が経った。

「聞いたぞ、エステファニア。もうロブレへ発つ日が決まったそうだな」

「ごきげんよう、お兄様」

エステファニアがもうすぐお別れになる庭の花々を楽しんでいると、長兄がやってきた。エステファニアの警護をしていた親衛隊たちが首を垂れる。

兄は皇族に相応しい魔術の才に恵まれたうえ、武人としても鍛えている筋骨隆々な大男だ。赤い髪を短く切りそろえ、鋭い緑色の瞳には知性も宿っている。まさに強い帝国を体現するような皇太子だった。

だが、嗜好としては酒と女にしか興味がないので、庭に現れることは滅多にない。おそらく、エステファニアと話すためだけにここへ来たのだろう。

「婚姻の神託がようやく下ったと思ったら、まさか相手がシモンだとは。あいつは優男だからな。顔は女が好みそうだが、身体はどうだか……」

兄のあけすけな言葉に眉根を寄せる。

シモンというのは、ロブレ王太子の名だ。

エステファニアは彼を見たこともないが、兄は皇太子として諸外国と交流があるので、会ったことがあるのだろう。

「ご心配なく。白い結婚でするので、彼がどういう人だろうとかまいせんわ」

きっぱり言うと兄は驚いたようで、しばらく口を開けたまま固まっていた。

「おまえ……男を知らないまま死ぬつもりか？」

「そうなりますわね」

「なんてことだ。それはやめておいた方がいい。一回くらい割り切ってシモンに……」

「いくらお兄様でも、それ以上は怒りますわよ」

なんだかんだ妹に弱い彼は、大人しく口を噤んだ。

兄の言葉は女性に投げかけるようなものではなく、エステファニアも内心腹を立ててはいる。しかし、彼なりに心配してくれているのは分かっているのだ。

帝国で高貴な身分の者は神託が下るまでは結婚をせず、神託が下った時、それに従う。そのため、心から愛した人と結ばれることはほとんどない。

しかし男性は結婚後に側室を囲うことができるので、妻は神託に従った政略結婚の相手だが、その裏で他の女性と身体や心を通わすことはできる。

だが、子を産む女性にはそれが認められていない。妻が不貞を働き、別の種からできた子どもを後継ぎにされては困るからだ。

この男女の格差は帝国に限らず、世界的なものだ。

つまり女性であるエステファニアは、シモンとしか身も心も通わせることが許されない。しかもただの政略結婚ではなく、神託によって定められた相手だ。離縁は許されない。

エステファニア自身がシモンと身体を重ねることを拒否することは、つまり男を知らぬままその生涯を終えることを意味する。

色を好む兄は、それを心から憐れんでいるのだろう。

もちろん、エステファニアにも惜しく思う気持ちはあった。

昔、エステファニアがまだ七歳という性を知らない時期に、婚姻を結ぶまで純潔を保つよう神託が下ったことがあった。

皇女である以上、神託がなくとも純潔であることを求められるため、なぜ改まってそのような神託が下ったのか、家族や神官たちは首を傾げた。

しかし、神託が下ったということは何か大きな意味があるのだろうと、エステファニアの身を守るために去勢された騎士と魔術師からなる親衛隊が組織され、万が一がないよう、常に彼らに従えて生活してきた。

何があっても親衛隊と家族以外の男と二人きりにならぬよう厳しく言い聞かされてきたし、それを守ってきた。

きっと、それだけ大きな意味のある婚姻を結ぶのだろうと思っていた。神託によって定められた、自分に相応しい夫に抱かれるのだろうと思っていたのだ。

けれど神があてがったのは、新興国の、歴史の浅い家の王太子だった。

王太子とはいえ、皇族からすればロブレ王家など蚕族ばんぞくのようなものだ。そんな男に大事に守ってきたこの身を貫かれるなど、到底耐えられない。

神託に異を唱えることになってしまったため口にはできないが、どうしてそんな男に自分をあてがうのか、と神に縋りたかった。

何か意味があるはずだと神託が下ってから改めてロブレのことを学んでいたが、釣り合っていないという不満が大きくなるばかりだ。

「良いのです。わたくしは帝国の女ですから、初めから幸せな婚姻関係を得られるなどと思っておりませんでしたから」

「それは……いや……」

兄は決まりが悪そうに頭を掻いた。

他国の詳しい事情は知らないが、少なくとも皇族や帝国貴族に仲睦まじい夫婦はほとんどいなかった。

男たちは神託で決まった結婚相手を愛そうとするのではなく、好みの女を囲ってそちらに夢中になる。同じことを許されない妻たちは、跡継ぎを産むために夫に抱かれることはあれど、心から愛されることなく生涯を終える。

兄夫婦もそうだ。エステファニアにとってはなんだかんだ自分を可愛がってくれた兄なのでつい甘く見てしまうが、皇太子妃——義姉の気持ち pensando、胸が苦しくなる。兄が妻ではなく別の何人かの女の部屋に通っているのは、有名な話だった。

「そうだな。すまない、軽率だった。ただな、エステファニア。おまえは頑固なところがあるから……その、人は気が変わることもよくある。それに素直になってみることも、たまには必要だと思おう。それを忘れないでくれ。兄からの餞別の言葉だ」

「……ありがとうございます、お兄様」

小煩い小言にうんざりしながらも、素直に頷いた。

兄とこうして話すことができるのも、あと少しだけなのだから。

それからひと月後、エステファニアは家族と別れ、ロブレ王国への馬車に乗った。手を振る両親や兄たちの姿を見ながら、長兄にかけられた饞別の言葉を思い出す。

——頑固だの、素直になれだの……わたくしはわたくしの気持ちに素直になつて、考えを曲げないだけですわ。優柔不断でないだけなのに、いつもお兄様たちは頑固だの、わがままの言つて……

言われた時はそうでもなかったのに、ふと思い出して異様に苛立つてしまう。

エステファニアはふんと鼻を鳴らして馬車のカーテンを閉め、前に顔を向けた。

第二章 ロブレ王太子シモン

馬車での長旅の末、エステファニアはロブレの王城に辿り着いた。

今までエステファニアを守ってきた親衛隊たちの仕事もここまでだ。

「長い間ご苦労でしたわ。帰国したら、充分な休暇をとりなさいな」

彼らは深く頭を下げたあとに馬車に乗り込み、帝国へと帰っていった。

去勢され、今まで毎日二十四時間エステファニアを守ってきた男たちだ。皇帝も、その労苦に見

合った報酬を与えるだろう。

待っていたロブレの役人に中へ案内されると、そこには一人の「白い」という印象の若い男がいた。彼は一步前に進み、深い礼をする。

「ようこそお越しくさいました。わたくしがロブレ王太子、シモンと申します」

シモンは指通りの良さそうな銀髪で、背が高く、すらりとした体型をしていた。しかし注意深く見れば、白い軍服の上からでも筋肉がついているのが窺える。

長兄はシモンの身体付きに問題があるような言い方をしていたが、王族としては充分に見えた。

兄が暑苦しい見た目なので、それと比較すると細いだけのように思う。

事前に聞いていた話によると彼は今年二十四歳を迎え、十八歳のエステファニアより六歳年上になる。王侯貴族の結婚にはよくある歳の差だ。

人のよさそうな笑みを浮かべていて、それを崩さずにエステファニアを見つめている。

にこやかと言えば聞こえはいいが、常に笑顔で固まった表情はなんだか胡散臭く見える。弧を描くように笑った目からはアメジストの瞳が覗き、珍しい神秘的な色が、腹の底が知れない雰囲気を醸し出していた。

「お出迎えいただきありがとうございます。ヒラソル帝国の皇女、エステファニアと申しますわ」
エステファニアが礼を返すと、シモンは笑みを深くした。

「こんなに美しいヒラソルの姫君に妻になっていただけなんなんて、これ以上の幸せはございません。ご挨拶させていただいてもよろしいでしょうか？」

眉根が寄りそうなのを我慢して、手を差し出した。

シモンはエステファニアの前で跪き、恭しく手の甲にキスをする。

鳥肌を立てながらも、甘んじて受け入れた。この程度の接触は仕様がないうらら。

シモンは客観的には見目が良く、想像していたより身なりも立ち居振る舞いも悪くない。だが、どうしても田舎者が背伸びをしているように見えた。

ただキスをしたあと、本当に嬉しそうに笑いながら立ち上がったのは、そう悪くなかった。

元々、自分との結婚など望めないような男だ。そうやってこの幸運を思う存分にありがたがりなさいと思いが、シモンの笑顔を見つめる。

「それでは、こちらへどうぞ。家族も、あなた様にご挨拶をしたいとお待ちしておりました」

エステファニアはシモンが差し出した手を取り、歩き始めた。

案内されながら、王城の内装に目を走らせる。

この王城は、建物自体はロブレ王国の建国よりも古い。過去この一帯を治めていた別の王家が建てた城で、それを改築して使っているという話だ。

過去には帝国とも争っていた王家が建てた城だけあってなかなかだが、飾られている絵画や花瓶などは微妙だった。

時折良いものもあるが、おそらくそれは元々ここにあったものだろう。それに混ざっているこの城の内装にあまり合っていないものは、ロブレの趣味なのだろうと思った。

エステファニアが連れてこられたのは、応接間のようなだった。ロブレ国王と王妃、それから若い娘に迎えられる。

「ようこそいらっしやいました、エステファニア様。わたしがロブレの国王で、彼女が妃です。そしてこちらが、娘のリアナになります」

「初めまして、エステファニアでございます。お会いできて嬉しいですわ」

微笑むと、国王は緊張した面持ちで奥のソファを勧めた。エステファニアが座ってから、他の四人も腰を下ろす。

義理の娘になる女とはいえ、皇女として丁重にもてなそうとする姿勢に気分を良くした。もし玉座にふんぞり返って迎えられたら、どうにかなっていただろう。

シモンが隣に座ったことで少し沈んだ座面を不愉快に思いながらも表情には出さず、向かいに座った三人を見る。

国王と王妃は流石にそれなりに良い身なりをしていたので、特に思うところは無いのだが、問題はリアナだった。

彼女の着ている桃色のドレスも、金髪を纏めている髪飾りも、なんとというか……品がなかった。露出が激しいというわけではないのだが、やけに華美というか、可愛らしすぎるというか。

幼子が着ているのならまだ微笑ましく思えるが、たしかシモンには十八の妹がいるという話だったので、それが彼女なのだろう。十八の王女の身嗜みとしては、どうかと思った。

「可愛らしいドレスですね。こちらで流行りのものなのかしら？」

エステファニアが小首を傾げると、リアナは頬を赤くした。その表情は羞恥というよりも、喜びの色が強そうに見える。

「い、いえ！ わ、わたしの好みで、仕立てさせたものになります。いずれ、広まったら嬉しいとは思っておりますが」

瞳を輝かせる将来の義妹に対してエステファニアはにこやかな表情を浮かべたが、その視線は冷やかかなものだった。

「あの、もしよろしければ、エステファニア様の髪色に似合うようなドレスもございまして……」

「まあ。あなたが言うのだからとても素敵なおドレスなのでしょうけれど、年増としずみのわたくしはもう着こなせないのでしょうか。残念ですわ」

部屋の中の空気が凍りついた。ちなみにエステファニアとリアナは同じ歳で、当然向こうもそのことを知っているだろう。

「リアナ。エステファニア様とお会いできてはしゃいでしまう気持ちは分かるが、落ち着きなさい」

「あ、えっと……は、はい。申し訳ございません」

シモンの言葉に、リアナはしゅんとして口を噤んだ。

エステファニアは背筋を伸ばしたまま、俯く彼女から視線を逸らす。

——随分と……甘やかされて育ったようね。

帝国なら、皇女があんなドレスを着ることも、それで客人を迎えることも許されなかつただろう。それとも、やはりその程度の家、ということかしら。先が思いやられますわ。

ふうと息を吐き出すと、国王が苦笑して口を開いた。

「失礼いたしました。遠路遙々えんろはるばる、このような田舎に来ていただきまして、本当にありがとうございます。まさかヒラソルの皇女様をお迎えられるなどと、想像したこともなく……。帝国と比べるのもおこがましいほどに小さな国です。不便なこともあるでしょうが、できる限り快適に過ごしていただけるよう、力を尽くす所存です。どうか末長く、シモン共々よろしく願っています」

「まあ、ありがとうございます。こちらこそよろしく願っていますわ」

リアナの教育に思うところはあれど、国王のエステファニアへの対応は満足なものだった。

機嫌を直したエステファニアが笑うと、国王の笑みが少し安心したようなものになる。

「長旅のあとで申し訳ないのですが、少しお話しさせていただきたいことがあります。よろしいでしょうか？」

「ええ、かまいませんわ」

「では、妻と娘は、一度下がらせていただきます」

「どうぞ」

王妃とリアナ、そして部屋の中にいた侍従や護衛たちは、国王の合図で部屋を出ていった。

エステファニアとシモン、国王のみが残る。

「実は、婚姻の条件について、詳しくお話しさせていただきたいと思っておりまして」

「何でございましょう？」

何を言われるのかと身構える。

エステファニアが嫁ぐにあたり、帝国はいくつかロブレに言いつけたことがあった。エステファニアを不当に扱わないようにや、貿易や軍事の面で互いに協力しようなど、姻戚関係になるにあたって当たり前のものが多い。

やはり口を挟まれる事柄としては、白い結婚を望んでいることだろう。その条件を撤回しろと言われても絶対に頷かないと思いがら、国王の言葉を待つ。

「その、シモンとあなた様が清い関係で居続けるということですが……」

エステファニアが眉を顰めると、国王は慌てたように続けた。

「皇帝陛下からそれが婚姻の条件だとお話があり、承諾いたしました。その結果、あなた様をこうして迎えられているのですから、それを撤回しようとは、まったく思っておりません。ただ、このことを他の者には伏せたいのです」

「なるほど、お話は分かりましたわ」

つまり、二人が白い結婚であることは、ここにいる三人とエステファニアの家族、両国の重鎮のみが知る情報であり、対外的には、二人の間に夫婦の営みがあると思わせたいということだ。

おそらく、シモンと他の女の間に産まれた子どもを、公式にはエステファニアの——皇族の血を引いた子どもということにしたいのだろう。

皇族の血が入れば、ロブレ王家の格は間違いなく上がる。事実がどうであれ、皇族の血が入ったと思われればそれで良い、ということだ。

正直なところ、シモンと交わったと思われるのすら嫌だが——それは仕様のないことだろう。

そもそも二人に夫婦関係がないことを言いふらすのもおかしいし、今回の神託が下った時点で、それは覚悟していたことだ。

ロブレ王家はヒラソルの権威が欲しいし、エステファニアは神託に従わなければいけない。これは、政略結婚なのだ。

ヒラソルの皇族が神託によって婚姻相手を決めているというのは、誰もが知っていることだった。あまりにも向こうの利益を削ったことで万が一断られれば神託に反することになり、こちらだって困ることになる。

無論、ロブレという小国がヒラソルと姻戚になる機会を逃すとは思えないが……それでも、エス

テファニアは頷いた。これは、こちらが譲歩してやるべきだろう。

実際にこの身がロブレなんぞの男に組み敷かれるという屈辱さえ回避できれば、それで良い。

「いいでしょう。このことは、以後誰にも口外しません」

「ありがとうございます」

国王はほっとしたように笑い、シモンは相変わらず胡散臭い笑みを浮かべたままエステファニアを見つめていた。内心気持ちが悪く思いながら笑い返す。

「式の日程ですが、あらかじめ書簡で決めていた予定どおり、一週間後になります。ドレスなどはもうご用意ができておりますが、細かい直しがないか確認させていただきたいと思っております。

これからでもよろしいでしょうか？」

「ええ、分かりましたわ」

「長旅でお疲れのところありがとうございます。それでは、衣装部屋まで案内させます」

国王がテーブルの上のベルを鳴らすと、王妃と娘、侍従たちが戻ってきた。

エステファニアが席を立つと、なぜかシモンも立ち上がる。

結婚が決まっているとはいえ、まだ正式には夫婦ではない。まさかについてはこないだろうなど視線を向けると、笑みを浮かべた瞼の奥から、熱い瞳を向けてくる。

「エステファニア様。お会いしたときにお伝えした、これ以上の幸せはないという言葉は嘘偽りのないわたくしの想いです。あなた様と夫婦になるという幸運を与えてくださった神と、こうして実際にわたくしのもとに来てくださったあなた様への感謝の念に堪えません。あなた様に不便がない

よう尽力してまいりますので、どうか、よろしくお願いいたします」

エステファニアは驚き、しばらく目を瞬かせることしかできなかった。

シモンの様子から、彼にとってこれはただの政略結婚ではないのでは、と思わせるような熱意を感じたのだ。

帝国の者にとっては、結婚とは全て神託によるもので、将来の帝国の利になる縁を結ぶためのものだ。そこに個人の感情は関係ない。だから夫は他の女を囲い、妻は跡継ぎをつくるという務めを果たすためだけに——場合によっては、跡継ぎすら他の女が産んだ子どもになることすらある——存在し、枯れていくだけなのだ。

そんな夫婦ばかり見てきたエステファニアにとって、結婚とはそういうもので、他の国でも程度の差はあれど同じものだろうと思っていた。

だから、シモンもエステファニアには興味がないのだろうと思っていたのだが……

——もしかしてこの男、わたくしに気があるのかしら？ でも、そんなはずないわよね。初めて会ったばかりですし……

おそらく彼は野心に溢れていて、エステファニアに取り入ることで帝国との結びつきを強くしようとしているのだろう。

そう結論付けて、エステファニアも笑みを作った。

「まあ、ありがとうございます。わたくしこそ、夫となる方がそんなことまで言うてくださる殿方でとても嬉しいですわ。どうぞよろしくお願いしますね」

シモンが目を見開いた。今まで半分ほど隠されていた紫色の瞳が剥き出しになる。仮面のように張り付いていた表情を崩せて、エステファニアは笑みを深くした。動揺させられた仕返しができる、と気分を良くする。

「それではまた、ごきげんよう」

エステファニアは部屋の者たちに笑いかけ、部屋を出ていった。



「何よ、あの人！」

エステファニアが部屋を出てから少しして、リアナが憤慨した様子で声を上げた。

それを窘めるように、シモンの母親——王妃がリアナのドレスを撫でる。

「あなたがそんな格好をしているからよ。やはり皇女を迎えるには相応しくなかったわね」

「いつもより控えめにしたわよ！ お母様だって、まあこれくらいなら……って許してくれたじゃない！」

「そうだけれど……はあ、いえ、わたしが悪かったわ。甘かったわね」

ため息をつく王妃に、国王は苦笑した。

「あのくらしいの嫌味で済んで良かったよ。帝国と縁ができるのは嬉しいが、正直荷が重いな。これからやっていけるのかどうか……」

「わたしは無理！ いくらなんでも、あんな言い方しなくても良いじゃない！」

「それはわたしもそう思うけれど、しょうがないでしょう。皇女様なんだから」

「でも、うちに嫁いでくるのよ！ いつまでも皇族気分でいられても困るじゃない！」

「まあ、それもそうだが……」

ヒラソルの皇女を持って余した様子の家族に、シモンはため息をついた。

今回は父が頑張ってくれたおかげで何とかだったが、この調子ではいつか、エステファニアが家族に愛想を尽かして帰ってしまう可能性もある。

ずっと焦がれていた女性と、やっと結婚できるのだ。それだけは避けなくてはならない。

「リアナ。そもそもお前が無礼を働かなければあはならなかったんだぞ。分かっているのか？」

「ふうん？ お兄様はあの女の味方をするのね」
当然愛するエステファニアの味方だが、それを口にすればこの妹はすぐに臍を^{へそ}曲げ、下手するとエステファニアに絡みに行きかねない。そうなれば彼女が帰ってしまう可能性がぐつと高まる。少なくともエステファニアがこちらでの生活に慣れるまでは、極力二人を会わせない方が良いでしょう。

だが、このままリアナが変わらなければいつかはそうなってしまうかもしれない。

「敵か味方かではなく、事実だ。心から人を迎えようとするのなら、自分を表現しようとするのではなく、その場に相応しい格好をするものだろう。なのに、そんなドレスを着るから言われるんだ。ちゃんとしたものを着るように言ったよな？」

「だから、大人しめにしたわよ」

「大人しめではなく、相応しいものにしろと言ったんだ。そうやって我を出そうとする態度がエステファニア様の怒りを買ったんだろう。お前だって、他国に嫁ぐかもしれないんだ。その時にそんな態度では困るぞ」

「それは、そうだけど……でもここは、ロブレだし……」

リアナも自分の非を分かっているながらも、素直に認められないのだろう。

確かにエステファニアの言い方はきつかったし、反発してしまう気持ちも理解できる。だが先に礼を欠いたのはリアナなのだから、仕様がないだろうに。

いくら妹とはいえ、理性よりも感情が上回って納得しない様子にうんざりしていると、リアナは意地の悪い顔をした。

「まあ、わたしはいいわよ。そのうちどっかに嫁いでおさらばだからね。問題はお兄様じゃない？ ずうっとあの人が隣にいる人生を送るのよ。あんなに猫被っちゃって、どこまで持つのかしらね？」

「俺は猫など被っていないが」

部屋にいる者のうち数人——主にシモンの侍従だ——が吹き出したので、睨んでおいた。

国王と王妃は苦笑し、リアナは腹を抱えてげらげらと笑っている。

前々から王妃としては碎けすぎだと思っていたが、エステファニアを見たあとだと尚更だった。

——まあ、この天真爛漫さもこいつの良いところではあるが……

なんだかんだ、この飾らない雰囲気は国民に人気なのだ。

「あれで猫被ってないは無理あるわよ！」

「いつもあんなものだろうが」

「外ではね？ でも、夫婦になるのよ。これからずっとああしているつもり？ いつか耐えられなくなるわよ」

「大丈夫だ。普段はともかく、さっきは別に無理していたわけじゃないからな」

「あれで？ なんなら、いつも諸侯を相手する時よりも気を遣ってたじゃない！」

「そりゃそうだろう。愛する女性の前なのだから」

「あ、あい……？ は、はあ!？」

リアナはあんぐりと口を開け、国王や王妃、侍従たちは目を見開く。

表情を崩さないのは、シモンが幼い頃から付いている侍従だけだった。彼はシモンの想いを知っていたのだ。

「本気で言ってるの!？」

「ああ」

「どうして!? どこが!? 見た目!？」

人生で最初に最後に違いない、恋に落ちた瞬間を思い返す。

昔参列した帝国の祭典で、幼くも神々しい美しさを放っていたエステファニア。話すことも許されなかったが、遠目ながらも一瞬だけこちらを見た瞳と目が合った瞬間、稲妻が全身を駆け抜けた。

あれ以来、シモンの心は彼女に囚われている。

「まあ……そうなるのかな。一目惚れだ」

「いや、確かにあの人が綺麗なのは認めるけど……お兄様が!? 一目惚れ!」

今まで女性に興味を持った様子を見せずに生活していたから、ここまで驚かれているのだろう。シモンは王太子として国内の令嬢たちから熱い視線を送られてきたし、縁談もあつた。だが、大して国の利にならないからと理由をつけて全て断ってきたのだ。もちろん、種を蒔くような真似をしたこともない。

おかげでシモンは女性に興味のない野心に溢れる人物だと思われていたし、その方が都合が良いので放っていた。

そして帝国からの縁談にはすぐ飛び付いたので、周囲のシモンへのそういった印象はさらに強くなった。

ところがここに来て惚れた腫れたの話をし始めたので、余計に驚いたのだろう。

そもそもシモンが今まで女性になびかなかつたのも、国を大きくしようと野心を燃やしていたのも、全てはいつかエステファニアと結ばれるためだったのだが……まあ、それはわざわざ言うこともない。

自分でも女々しい考えだとは思うが、口にするると願いを叶える力が弱くなってしまふように思うのだ。

一週間後にはエステファニアが妻になるという長年待ち望んだ瞬間が訪れるが、それだけで満足する気はない。これからの長い人生を彼女と愛し合い、共に過ごしたい。

そのためには彼女に心を開いてもらう必要があるし、この国での生活を気に入ってもらわなければならぬ。まだまだ、シモンがやらねばならないことは山積みだ。

「いや、そりゃあ綺麗よ! でもあの性格よ!? 考え直しなよ!」

「リアナ。さつきも言ったが、そもそもお前がきちんとしていればあの方もあんなことを言わなかっただろうし、彼女はあれで良い。あの美貌だし、高貴な方だ。あのくらいがちょうど良いだろう」

「……お兄様ってマゾなの?」

神妙な顔をするリアナに、呆れかえった。

「何を馬鹿なことを言っているんだ。そんな俗な話ではない。というか考え直すも何も、俺とあの方は結婚するんだ。好意を持っている方が良いだろう」

「いや、うん、そうなんだろうけど」

意味の分からないことを言うほど、兄が一目惚れしたという事実が信じられないのだろう。

「エステファニア様がどうかは分からないけれど、シモンが彼女を気に入っているのなら良かったわ。義務感で妻として扱うより、上手く関係を築いていけるでしょう」

王妃は安心したように笑ったが、国王は渋い顔をしていた。

普通なら想いを伴う結婚で、夫婦仲睦まじい姿を見せるのが国民にも良いのだろうが、今回の結婚においては、その想いはむしろ危険をもたらすものだ。

白い結婚でなければいけないのに、シモンには彼女を求める気持ちがあるのだから。

「まあ、何にせよおまえなら大丈夫だと思うが……上手く付き合ってくれ」
父に釘を刺され、シモンはにっこりと笑った。

「ええ、もちろん」

第三章 皇女と王太子の結婚

エステファニアがロブレ王国に来て一週間後、盛大な結婚式が行われた。

婚礼用のドレスはシルクできていて、ロールカラーにプリンセスラインのもだった。非常に長いトレーンに細かい刺繍、たくさんの真珠が縫い付けられており、見ごたえのあるドレスだ。

サイズは結婚が決まった時点で王国に伝えていたのでエステファニアがロブレに来た頃には完成していて、少し直しただけだった。

デザインに細かく口を出せなかったのが惜しかったが、思っていたよりも満足のいく出来で、エステファニアの機嫌はとて良かった。

流石に誓いのキスを省略することはできずにシモンと口付けを交わしてしまったが、まあ軽いキスくらいは仕様がなからいいか、と流せたほどだ。

式自体はロブレの名門貴族にしか参列が許されなかったが、その後のパレードには多くの国民が集まった。馬車に乗った二人が現れると歓声が上がリ、手を振るとさらに大きくなる。

帝国での兄たちのパレードに比べると騒がしかったが、馬車の前に飛び出すような者は流石におらず、最低限の統制は取れていた。

おかげで気分を害することなく素直に自分が歓迎されていると受け取ったエステファニアは、にこやかに手を振り続けた。

パレードが終わり、馬車が王城の裏口に停まる。

エステファニアがシモンの手を取って降りると、シモンが感嘆のため息を漏らした。

「とても……とてもお美しいです、エステファニア様。あなた様の隣に立てるといふ栄誉をいただき、改めて感謝申し上げます」

「ふふ。ええ、どうかそのまま、その喜びを噛み締め続けてくださいませ」

言外にそれ以上は求めるなど伝えたが、シモンは動揺を見せなかった。当たり前のように頷き、エステファニアを眩しそうに見つめる。

「もちろんでございます。隣に立っていただけのだけで、夢のようです。それ以上は望みません」

シモンはエステファニアの意図が通じていないようでも、強がっている様子でもなかった。

心からそう思っているのならば良いが、本心はそうでなかったとしたら、ここまで自然に言えるものだろうか。

エステファニア自身に興味がなかったとしても、女にこうも言われてしまえば、多少なりとも腹を立てるものではないかと思うのだが……

ロブレごとき国の王太子だと侮っていたが、彼はなかなかのやり手なのかもしれない。

パレードのあとには晩餐会があり、ロブレの諸侯たちと顔を合わせた。

流石のリアナも今日はこの場に相応しいドレスを着ていて、話をした貴族たちもそれなりだったので、以前のようにエステファニアが嫌味を言うことはなかった。

しかし帝国の貴族たちと比べてしまうと、どうも垢抜けない。

他のロブレ人と比べるとシモンはまだ帝国でも通用しそうな振る舞いで、初対面の頃こそシモンのこともかなり下に見ていたが、改めて考えると彼はまともな方なのかもしれない。

誰と何をしても崩れない笑みは国王よりもよほど考えが読めず、シモンの方が交渉事の才能はありそうだった。

晩餐会が終わると、夫婦の寝室に案内された。絨毯じゅうたんやカーテンは深い緑色に統一され、マホガニーの家具で揃えられた部屋はエステファニア好みの雰囲気だった。

部屋は気に入っても、これからシモンと一晩ここで過ごすと思うと卒倒しそうだった。

だが、夫婦の関係があると思わせるといふ話に頷いたのは自分だ。決めたことはやり遂げなければならぬ。

もしシモンが手を出してくるようならすぐに股間を踏んづけてやると思いながら、侍女たちに身体を磨かれた。

薄手のナイトドレスを着て、備え付けの浴室から寝室に戻る。

すでに支度を終わらせて寝衣に着替えたシモンが、ソファでハーブティーを飲んでいて。侍女たちが退室し、二人だけが寝室に残される。

「エステファニア様もお飲みになりますか？ 落ち着きますよ」

「いいえ、結構ですわ」

何かを盛られている可能性を考えて、エステファニアは首を横に振った。

ロブレ王家に嫁いで皇籍を外れた身とはいえ、皇女に薬を盛るなど大問題になるから流石にやらないだろうが、警戒するに越したことはない。

薬まではいなくても、たとえば性的興奮が高まりやすい香りのハーブティーだったり、酒が混ぜられていたりする可能性もある。気の強い自分が流されることはないと思うが、万が一の可能性の芽は摘んでおかなければ。

エステファニアはシモンの向かいのソファに座った。

部屋にあるベッドはもちろん一つだけだが、彼と入る気は毛頭ない。もしベッドを譲られたとしても信頼できない男の前で眠るつもりもなく、エステファニアは一睡もせずに夜を明かすつもりだった。

読書なり刺繍なりやることがあれば良いのだが、残念ながら部屋の中には暇つぶしができそうなものはない。

明日からは何か持ち込もうと考えて——そうだ、この生活はいつまで続くのだろう。

「この寝室には、どの程度来ればいいのかしら」

「具体的な期間は考えていませんが、しばらくは毎日こちらで夜を過ごしていただきたいです。新婚で別々に寝ていると、不仲を疑われるでしょうから」

エステファニアは眉根を寄せたが、シモンは感情の読めない笑みを浮かべたまま続けた。

「あなた様に近い赤い髪と緑の目の女性を見繕っているところですので、その用意ができましたらわたくしは彼女たちの寝室にも行きます。なのでその時は、一人でここを使っていたとしても、自室で眠られてもかまいません。もちろん側室がいようと、週に何度かはこちらの部屋で共に過ごしていたできますが。共に寝ていないのに子どもができてはおかしいでしょう」

「……まあ、そうですね」

しばらくは昼夜逆転の生活を送ることになりそうだとため息をつく。

「側室が身籠ると、わたくしはどうなるのですか？」

「部屋で大人しくしていただくことになるでしょうね。お腹が大きくなる時期から子どもが産まれるまでは信頼できる侍従だけに世話を任せて、人の目には触れないようにするしかないかと」

エステファニアが妊娠していないことを隠すためだろう。

側室を囲うこと自体は、身分の高い男にはよくあることだ。そこからエステファニアが妊娠していないという事実に辿り着くことはないだろうが、側室の妊娠とエステファニアが妊娠していないことを、上手く誤魔化せるのだろうか。

一瞬気にはなつたが、そこまで考えてやる必要はないか、と息をつく。

他の女の子どもをエステファニアの子だと誤認させたいのは、向こうの事情だ。エステファニアにはそれを邪魔する理由も意思もないが、積極的に協力する気もない。それを考えるのは向こうの仕事だ。

エステファニアにとって大事なことは、自分が平穩に暮らすことだけだった。

「その時は、寝室は別で良いですわよね？」

「ええ、もちろん」

ならば早く側室を見つけて孕ませてもらわなければと思いつながら、手持ち無沙汰のため肌触りの良いナイトドレスを撫でる。

シモンが、空になったカップをソーサーに置いた。

「わたくしはそろそろ寝ようと思っておりますが、エステファニア様は？」

「わたくしは眠るつもりはありませんので、ご自由にどうぞ」

シモンが驚いたように目を見開いた。

「一睡もしないつもりですか？」

「ええ。何があるか分かりませんから」

エステファニアが頷くと、彼は眉尻を下げて苦笑する。

「まさか、あなた様や皇帝陛下との約束を反故にはしませんよ」

「あなたがそう申ししても、それが本心かどうか、わたくしには分かりませんから」

シモンは不快感を表すどころか、心配そうな顔をした。

——この表情も、自然となのか、作ったものなのか……

初対面の時からそうなのだが、シモンは表情を作るのが上手く、なかなか本心を悟らせてくれない。

いつも貼り付けたような笑みを浮かべていて、相手がいる時は言葉や反応に合わせて表情が変わるのだが、なんとというか、あまりにもその時に相応しい表情のみを浮かべるのだ。

誰かが冗談を言えば明るく笑うし、愚痴のようなものを聞けば同情するような顔をし、自慢話には興味深そうな顔をする。相手の冗談がつまらなかったり、興味の無い話を聞かされたりする場面だってあっただろうに、そういう素振りを見せないのだ。

シモンは常に相手が欲しがっている表情を作っていて、自分の感情を表に出していないように感じる。

熱の籠った眼差しを向けられたこともあったが、それも作られたもののように思えてきた。

それほど、今まで見たシモンの——特に、先程の晩餐会での振る舞いは完璧だった。

「では、あまり言っても困らせてしまうだけでしょうから、わたくしは眠らせていただきますが……神に誓って、あなた様に無礼なことはいしませんという事は伝えておきます。一応端の方で寝ますので、耐えられなくなったらいつでもどうぞ。お身体を壊さないよう、お気を付けください」

「ええ。無意味なお気遣いがありますがどうぞございます」

わざとシモンを怒らせるような事を言ったが、彼はやはり困ったように苦笑するだけだった。

シモンは静かに立ち上がり、天井の明かりを暗くする。そして、わざわざエステファニアより遠い方からベッドに上がって横になった。

しばらくすると、寝息が聞こえてくる。

——あれでも表情を崩さないのね。

妻にあんな生意気なことを言われて、怒った様子を見せないとは。

皇族の血を笠に言う事を聞かない女など、王太子からしたら腹立たしくて仕様がなだらうに。それともまさか、本当にそれでも苛立たないような心根の持ち主なのだらうか。

——きつと、それはしないでしようね。

そういう人が世の中にはいないとは言えないが、少なくともシモンはそうではないだらう。

そういう人間は人としては素晴らしいのかもしれないが、為政者には向いていない。もし彼がそういう性格だとしたら、国王や周囲の者たちにあそこまで信頼されてはいなかっただらう。

エステファニアがロブレに来てまだ一週間だが、それでも、シモンがかなりの仕事を任されていることは見て取れた。

昨日までロブレ王族の籍に入っていなかったエステファニアは、公務もなく自室で静かに過ごしていたのだが、窓から外を見ると、シモンが軍服を着て朝から馬車に乗り込んだり、他国の要人を迎えたりする姿をよく見かけた。

エステファニアがロブレに来て初めて会ったのも、国王ではなくてシモンだった。それだけ、シモンは王太子として信頼されている。

おそらく、彼の言葉や表情は、そのまま鵜呑みにして良いものではない。

帝国の貴族もそんな者たちばかりだったので、なんとなく似た雰囲気を感じ取っていた。ベッドを見ると、シモンは端の方でエステファニアに背を向けて眠っている。

本当に為政者として物事を考えられる人間ならば、帝国との契約を反故にすることもないだらうから、ここまで警戒しなくても良いのだらうが……そう判断できるほど、彼のことを知らなかった。エステファニアはため息をついて、暇つぶしにシモンが使っていたティーカップの柄を眺めたり、眠気覚ましに部屋の中を歩いたりした。

そうして夜を過ぎ窓から星を眺めていると、東の空が明るんできた。

シモンを起こしてしまうだろうと慌ててカーテンを閉める。しかし振り向くと、身体を起こすところだった。

「起こしてしまいました？」

シモンは少しの間カーテン越しの日光を眩しそうに眺めてから、いつもの笑みを浮かべた。

「……いいえ。いつも日の出と共に起きていますので、エステファニア様の所為ではございませんよ」

「そう。では、開けますわね」

朝日が部屋の中を明るく照らす。眠っていないエステファニアには痛いくらいに眩しくて、何度か瞬きをした。

「ありがとうございます。ずっと起きていらつしやったのですか？」

「ええ」

「では、わたくしは早く退散するとします。眠いでしょ？」

「急がなくても結構ですわ。自分の部屋で寝ますので」

シモンも自由に出入りできるこの部屋で寝てしまつたら、一晚耐えた意味がない。今日も公務があるという話は聞いていないし、自室で昼寝をするつもりだった。

シモンは笑つたまま眉尻を下げる。

「そうですか。それは、早く側室を見つけないけませんね。不便でしょう」

「ええ、よろしく願いますわ」

「早く快適に眠っていただけると、尽力します」

「ふふっ」

起き抜けでも崩れない表情と態度に、自然と笑みが零れた。ここまでくればもう、見事としか言いようがない。

シモンは不思議そうに首を傾げた。

「いえ、なんでもありませんわ」

心を許したわけではないが、エステファニアはシモンのことをそれなりに気に入った。ロブレごときの王太子と侮っていたが、彼はなかなかの器の持ち主のようだ。

神が神託によってエステファニアをロブレに嫁がせた以上、この縁がいつか帝国の助けになる……はずだ。

それがいつになるのかは分からないし、正直今のロブレの国力を考えると、とてもそんな未来が来るとは思えない。

だが、帝国の貴族社会でも充分に通じそうなシモンの振る舞いを見ると、そんな未来もあり

えるのではないか、とほんの少しだけ思わされるものがあった。

「もう部屋に戻つてもよろしいでしょうか？」

「ええ、お疲れ様でした。どうぞゆっくりお休みください」

笑うシモンに見送られて部屋を出る。

扉のそばで、シモンとエステファニアの侍従が待っていた。それ以外にも文官なのかなんのか分からないが、廊下を歩いている人が何人かいる。

エステファニアは、これみよがしに自分付きの侍女に言った。

「わたくしは少し疲れたので、自室で休みますわ」

部屋に向かつて歩き出すと、エステファニアのあとを侍女たちがついてくる。

——このくらいは、協力してあげても良いかしら。初夜は上手くいったようだとても噂が流れると良いのですけれど……どうかしらね。

それから一週間、エステファニアはシモンと同じ寝室で過ごした。

もちろん、エステファニアは眠っていない。読書や刺繍などで暇を潰し、その間シモンが起きることはなかった。

そして夜眠れない代わりに、公務がない時間は自室で昼寝をする生活を送っている。

今は嫁いできたばかりで、公務といつても、結婚式後の晩餐会に出席できなかった貴族と顔合わせの挨拶をするくらいだ。だが、いつまでもこんな生活はできないだろう。

「側室のほうはどうなのですか？」

結婚して一週間目の夜、寝室でいつものように眠る前のハーブティーを飲むシモンの向かいに座って切り出した。

シモンはカップを置いて、申し訳なさそうな顔をする。

「候補は何人か挙がっているのですが、まだ身元の確認に時間がかかっておりまして。申し訳ございません」

「そう」

まだ一週間だからそれは仕様がなだらう、とため息をついた。早くてもひと月ほどはかかるだろうか。

いくら昼寝をしても、やはり夜にぐっすり眠れない所為で、最近は肌の調子も悪い。

たまには別の寝室で眠っても良いのではないかと言いたくなるが、新婚の時期に別々で寝ているという話が広まるのを避けるべきなのも分かる。

今のところ、昼間に眠そうなエステファニアを都合良く解釈して、たいそう夜が盛り上がっているようだ、という見方をする人々もいるのだ。せっかくそんな勘違いをしている人がいるのだから、のちのちの安眠生活のために不仲説が流れるような行動はしたくない。

ちなみに、この部屋を掃除するのはシモンや国王が特に信頼している侍従のため、共寝の痕跡がなくとも、それが外に漏れることはないそうだ。

シモンが空になったティーカップにハーブティーを注ぎ、また飲み始める。

毎回同じものを飲んでいたので一昨日くらいに何なのか聞いたのだが、眠りを助けるハーブティーらしい。朝早く起きるから、短い時間でもぐっすり眠れるように飲んでいそうさ。

やはり勧められた時に飲まなくて良かったと思うが、エステファニアは眠れぬ夜を過ごしているのに、あんなお茶まで飲んですやすやと眠るシモンを腹立たしくも思う。

——清い関係を望んだのはこちらですから、仕様がなないのですけれど。

エステファニアも馬鹿ではない。感情的には思うところがあれど、それをシモンにぶつけるのはお門違いだというのは分かっているのだ。

帝国の発展のために、親衛隊の人生を巻き込んで純潔を守り、結婚の神託を待ち続けたエステファニアにとって、格下のロブレに嫁ぐというのは、神に裏切られたような気分だった。

神託は絶対だと分かりながらも心の底から受け入れることができず、白い結婚を維持するという僅かな反抗をしているに過ぎない。ロブレからすれば面倒なわがままだという自覚はあった。

そして内心はどう思っているのか分からないが、今のところそれを受け入れ、紳士的に接してくれるシモンへの感謝の気持ちもある。

「そういえば、今日も軍服を着てどこかへ行っていたけれど、何をしていますか？」

「気にしてくださいのですね。嬉しいです」

シモンが笑みを深くした。

——別に、あなた個人に興味があるわけではないのですけれど。

エステファニアはこれ見よがしに眉根を寄せたが、シモンの表情は変わらなかった。

彼は時折、エステファニアに気があるような素振りを見せる。

どうせエステファニアを口説き落として、本当に皇族の血が混ざった子どもをつくりたいだけだろう。

彼のこの態度がいつ崩れるのかというのが、最近の一番の関心事だった。

「わたくしもいざれあなたと公務にあたるでしょうから、どういう仕事をなさっているのか気になっただけですわ」

「そうですか。ですが、わたくしが軍服を着ている時の仕事は、あなた様に関わっていただくことはありません。あれは礼装として着ているのではなく、まさに軍に関わる仕事をしているので」

嫁いだ身とはいえ、元々は帝国の人間だ。特に軍事関係の情報は、制限されるだろう。

それは理解できるし、別に良いのだが……

「戦の準備でもしているのですか？　ほとんど毎日行っているではないですか」

高貴な身分の者は、魔術を扱える者がほとんどだ。魔術は戦において重要な戦力になるため、男性は幼少の頃から魔術師としての教育を受け、軍人の側面を持つ。

だからシモンが軍事に関わるのは至極真っ当なことなのだが、頻度が問題だった。

魔術師であり王族である以上、軍と無関係ではいられないが、平時はそう関わりを持たない。

時折合同演習を行うことはあるだろうが、今のシモンを見ると、それこそ戦中か、戦争に備えているかのような頻度だった。

「……なんて、わたくしには言えませんかよね」

気になって聞いてはみたものの、それこそエステファニアには伝えられない情報だろう。

「そうですね。ただ、言えることとしては……」

シモンがティーカップを置いて言葉が続いたので、エステファニアは伏せていた視線を上げた。

「実は、帝国から縁談をいたたく少し前に、今まで見たことのない鉱石が発掘されました。その研究をしているので、今は忙しいのです」

「……多才なのですね」

「そうでしょうか。あなた様にそう言うただけると、自信になります」

研究など、それこそ研究者や技術者にやらせておくようなものに、王太子自ら関わるとは。

——多才な王太子に、神託の前に見つかったという鉱石。この結婚が帝国の利益に繋がるのは、案外近い未来なのかしら。

もちろん、鉱石の発掘と神託のタイミングが近かったのはたまたまだった可能性もある。ただ、関連があると考えてしまうのもまた自然なことだろう。鉱石の代わりに嫁がせられたと思うと、良い気分ではないが。

「それが終わりましたら、もしよろしければ帝国にも研究を依頼してみても？」

やはり人の質も設備も、帝国のほうが圧倒的だ。ロブレにとつても、悩みはするだろうが悪い提案ではないだろう。

「ええ。研究が難航した際には、是非。エステファニア様が結んでくださった帝国との御縁を、わたくしも王も大切にしたいと思っておりますから」

「ふふ、お話の分かる方が夫でありがたいですわ」

シモンが珍しく、輝くような笑みを見せた。

「そう言っていただけなんて、光栄です。あなた様に相応しい男になれるよう、励んでおりますから」

「まあ、お手ですこと」

「本心ですよ」

二人で笑い合ったが、少なくともエステファニアは心からの笑みではなかったし、おそらくシモンもそうだろう。

エステファニアのやわらかくも傲慢な物言いに笑みを崩さないどころか、こんな返しを言えるとは。

シモンの表情を崩せなかったことをつまらなく思う一方で、面白くもあった。

「それでは、わたくしはそろそろ眠らせていただきます。エステファニア様も、ご無理はなさらないよう」

「ふふ。早く側室が来てくだされば、無理も減るのですが」

「なるべく早く用意できるよう尽力しておりますので、もうしばしお待ちください」

「ええ、よろしく願いますわ」

二人でにこにこ笑いながら挨拶をし、シモンは天井の明かりを暗くしてベッドに入った。

ちなみに初日からずつと端に寄っていて、エステファニアが入れるスペースが作られている。

シモンが寝息をたてはじめると、エステファニアは抑えきれない笑みを浮かべたまま、ランプを点けて本を開いた。

シモンの取り繕った態度を崩そうとする静かな戦いを、気に入ってしまった。